



Data

監督：グエン・ケイ
 共同監督：チャン・ビュー・ロック
 脚本：グエン・ケイ/A TYPE MACHINE
 出演：ニン・ズーン・ラン・ゴック
 /ホン・ヴァン/ジエム・ミ
 -9X/オアン・キエウ/ジ
 エム・ミー/S. T365/
 ゴ・タイン・パン

👁️👁️ みどころ

時代は1969年、舞台はサイゴン。すると、ベトナム戦争一色の映画！思わずそう身構えたが、本作は女性映画、ファッション映画だ。同じベトナム人女性監督ながら、『第三婦人と髪飾り』（18年）とは全く異なる視点に注目したい。

1969年に「ミス・サイゴン」に選ばれ、最新ファッションを誇っているが、48年後の2017年にタイムスリップしてみると？ベトナムのアオザイは中国のチャイナドレスと共に男には憧れだが、モードとしては、また商売としてはどうなの？

「タイムスリップもの」は多種多様だが、1969年のニューイと2017年のニューイが「共闘」し、店の奪還とアオザイの復活を目指す、おとぎ話のような物語をたっぷり楽しみたい。



■□■時代は1969年。舞台はサイゴン！ベトナム戦争は？■□■

私が大学に入学したのは1967年4月。すぐに学生運動に飛び込んだ私は、国内的には70年安保闘争に向けた諸問題に、そして海外的には反戦フォークソングのブームが盛り上がる中、ベトナム戦争反対一色の政治闘争に取り組んでいった。ベトナム戦争はもともとベトナムの統一を目指す内戦だったが、ホー・チ・ミン国家主席率いるベトナム民主共和国（北ベトナム）からの共産化を防ぐという名目でアメリカが介入し、ベトナム共和国（南ベトナム）を支援したため、大規模かつ長期にわたる戦争になってしまった。アメリカ軍による“北爆”が始まったのは1965年2月からだが、それ以降急速に高まったベ

トナム反戦運動の中で国民の支持を失ったジョンソン大統領は、1968年には北爆の中止と次期大統領選への不出馬を表明した。しかし、北ベトナム軍によって、南ベトナムの首都・サイゴンが陥落し、ベトナム戦争が終わったのは1975年4月30日だから、1969年当時のサイゴンは戦争一色になっていたのでは？

そう考えると、時代は1969年、舞台はサイゴン。そんな映画である本作は、当然ベトナム戦争一色に？誰でもそう思ったはずだが、本作はさにあらず。本作冒頭に登場するのは、サイゴンで9代も続いているという老舗のアオザイの仕立て屋「タン・ヌー」だ。ベトナムのアオザイは中国のチャイナドレスと共に男の憧れだが、それはなぜ？そんなことを考えながら、本作導入部にみる「タン・ヌー」の店のアオザイの魅力をしっかり感じ取りたい。

「タン・ヌー」の経営者はカリスマ性タップリかつ超美人の母親（ゴ・タイン・バン）で、その一人娘がミス・サイゴンに選ばれるほどの美貌とファッションセンス抜群のニューイ（ニン・ズーン・ラン・ゴック）。また、「タン・ヌー」の店も来客たちも優雅そのもので、私が大学時代を過ごしていた1969年当時の日本よりはるかに豊かで華やかな雰囲気だ。さらに、老舗のアオザイ仕立て屋であるにもかかわらず、アオザイが嫌い、60年代の新しいファッションに夢中になっているニューイは、1968年に『天使の誘惑』でレコード大賞を取り『夕月』も大ヒットさせた、ミニスカート姿がよく似合う黛ジュンをはるかに超えたファッションセンスの持ち主だ。おいおい、これってホントの話？一瞬そんな疑問が湧いてきたが・・・。

■□■1969年から2017年にタイムスリップ！■□■

「タイムスリップもの」は概ね面白い。邦画における、そのかつての代表は、本広克行監督の『サマータイムマシン・ブルース』（05年）（『シネマ8』150頁）や、篠原哲雄監督の『地下鉄（メトロ）に乗って』（06年）（『シネマ12』45頁）、そして近時の代表は『明日にかける橋 1989年の思い出』（17年）だ（『シネマ42』50頁）。「タイムスリップもの」には、現在から過去に遡るものと、現在から将来に飛んでしまうものの、2パターンがある。『明日にかける橋 1989年の思い出』は2010年の現在から1989年の、昭和から平成に変わる時代にタイムスリップするものだったが、本作は逆に1969年の現在から2017年の未来（48年後）にタイムスリップするものだ。

本作導入部では、ベトナム戦争の真っ最中たる1969年のサイゴンとは到底思えない風景の中で、店の後継問題をめぐる母親と一人娘との確執が描かれる。もともと、母親は気長に娘の気持ちの変化を待っているようで、場合によれば、自分の良き理解者でありかつ自分に忠実な部下であるタン・ロアン（オアン・キエウ）に後継ぎ（もしくは、ショート・リリーフ）を託そうと考えているらしい。そんな中、母親は自分の技術の限りを尽くして娘のためにすばらしいアオザイを作ったが、ある日ニューイがそれを一人で試着し胸の

飾りに手を触れてみると・・・？あら、あら不思議、ニューイは突然2017年のサイゴンにタイムスリップしてしまうことに。

■□■48年後の自分とご対面！母親は？お店は？■□■

1945年（昭和20）年3月13日生まれたから、2020年3月13日には75歳になる女優・吉永小百合は、私が中・高校時代に見た「銀幕スター」のまま、ほぼ現在に至っているから、すごい。しかし、1969年にミス・サイゴンに選ばれていた美女ニューイの48年後は、およそその当時の面影を残さない太っちょおばさんアン・カイン（ホン・ヴァン）になっていたから、アレレ。

韓国映画のタイムスリップものである『怪しい彼女』（14年）はバカバカしいコメディ全開の中でも、ついホロリとする面白い映画だった（『シネマ33』282頁）。そこでは「青春写真館」で記念写真を撮る中で、70歳のおばあさんを若き日のオードリー・ヘプバーンそっくりの20歳の娘にタイムスリップさせていた。しかも、同作では「二人一役」の面白さが際立っていた。

本作もそれと同じように、1969年のニューイをニン・ズーン・ラン・ゴックが、2017年のニューイ（アン・カイン）をホン・ヴァンが演じているから、その対比をしっかりと確認したい。そしてまた、それ以上に、本作ではこの2人が世代を越えて共闘する姿に注目したい。2017年のニューイ（アン・カイン）がこんなにでっぷり太っているのは、酒飲みの自堕落な生活を続けたせい。それはそれで責められるべきだが、事情を聞いてみると、9代目の母親が急逝した後、店は傾き倒産。生家も取り上げ寸前の状態になっているらしい。その結果、「タン・ヌー」は2017年のタン・ロアン（ジエム・ミー）が承継していたが、店の実権はデザイナーのヘレン（ジエム・ミー9X）が握り、店を仕切っていた。そして今ではもはやアオザイは扱っておらず、すべて最新のモードばかりになっていた。なるほど、なるほど・・・。

しかし待てよ。ニューイはアオザイが嫌いで最新ファッションが得意だったはず。そうであれば、これだけ環境が激変しているなら、ニューイの最新ファッションセンスを発揮するのに、むしろベター。そう考えたニューイは「タン・ヌー」の中で己の力を発揮し、店の実権をヘレンから奪い返すべく、2017年のニューイ（アン・カイン）との共闘を開始することに。

■□■2人のベトナム人若手女性監督の異なる視点に注目！■□■

本作がベトナムの若手女性監督グエン・ケイの最新作なら、2019年11月25日に観た『第三夫人と髪飾り』（18年）も、ベトナムの若手女性監督アッシュ・メイフェアの作品。『第三夫人と髪飾り』は、「19世紀、北ベトナムの絹の里。富豪のもとに嫁いできた若き第三夫人」を主人公にしたもので、張藝謀（チャン・イーモウ）監督の『紅夢』（91

年)を彷彿させる名作だった。それに対して本作は、グエン・ケイ監督が自ら「女性を描いた映画ということでは、『8人の女たち』『若草物語』。ファッション映画ということでは『プラダを着た悪魔』を参考にしています。」と語っているように、とりわけ後半からは、ファッション映画の色彩が濃くなっていく。本作の鑑賞については、そんな2人のベトナム人若手女性監督の異なる視点に注目したい。

かつてのアオザイの老舗だった「タン・ヌー」も、今はデザイナーのヘレンが一切を仕切る「上流階級御用達」の最新モードの店になっていた。そのため、そこで交わされるファッションやモードの会話は、私にはチンプンカンプン。『プラダを着た悪魔』(06年)では、若手美人女優のアン・ハサウェイがアシスタントとして、メリル・ストリープ扮するファッション誌の独裁編集長の下で悪戦苦闘させられていた(『シネマ12』367頁)が、それは本作も同じ。ニュイは自分の最新ファッションセンスこそベストと考えていたが、それは1969年当時のもの。それから48年も経った2017年の最新ファッションは、ニュイの知らないものばかりだ。

しかし、そこは生まれつきの才能と持ち前の負けん気を発揮すれば、何とか追いつき追い越せるはず。そう考えたニュイは努力を重ねたが、それを応援してくれたのが、今の「タン・ヌー」の店を継いでいる2017年のタン・ロアンの息子トアン(S.T365)だ。若い2人が恋人ようになっていったのはごく自然だが、このようにニュイのファンやニュイが作るファッションの支持者が増えてくると、ヘレンにとってはいいことだが、その反面権力闘争の心配も芽生えることに。もちろん、ヘレンは現代的なファッションセンスの持ち主であると同時に、現代的で合理的な店の経営が持論。才能ある者を抜擢し、店の利益を拡大することを第一義に据えるはずだから、ニュイがヘレンの下でアシスタントとして能力を発揮し、会社に貢献すればそれでよし。ヘレンはそう考えていたはずだが、ニュイの企画を採用したアオザイのファッションショーで、ニュイが作ったアオザイのデザインが絶賛されると・・・。

■甘ったるい大団円だが、おとぎ話ならOK!

私が近時ハマっている、宮廷の権力闘争を中心とした華流ドラマは全50～60話の長編だから、登場人物が多いうえ、権力闘争のサマは複雑で奇々怪々。それに比べると、本作の1969年のニュイと2017年のニュイ(アン・カイン)の連合軍に、トアンというイケメンの応援団も加えた「権力奪還派」と、現有権力の保持を目指すヘレンとの「タン・ヌー」の店を巡る権力闘争(?)は単純でわかりやすい。その原因は、最新ファッションの中に、ベトナム伝統のアオザイの美しさを取り入れたニュイの新アイデアが観客からやんややんやの拍手喝さいを受ける中、ヘレンが「これは私のデザインだ」と発表し、ニュイの手柄を横取りしようとしたことだが、さてその展開は?

昨年のNHK大河ドラマ『いだてん～東京オリムピック噺～』は史上最低の視聴率だっ

た。しかし、女優・沢尻エリカの薬物問題のため女優の変更を含めて1週間遅れで始まった2020年の『麒麟がくる』は、初回から高視聴率。昨年は途中から観るのをやめた私も、今年はすべて録画して鑑賞するつもりだ。若き日の明智光秀像は謎に包まれているうえ、なぜ謀反を起こして主君の織田信長を殺したのかについても、その真相はわかっていない。しかし、本作のラストは、結局ヘレンが新作のアオザイファッションのデザイナーはニューイであると紹介したことによって、すべて問題は円満に解決。これなら謀反も起こりようがないわけだ。そのうえ、本作のホントの結末は、再びニューイが1969年に逆戻りし、自分が「タン・ヌー」の店をアオザイの老舗店として引き継いでいくと表明するので、母親は大感激。そんな大団円は甘いと言わざるをえない。しかし、もともと本作はおとぎ話のようなタイムスリップものなのだから、これはこれでいいのでは……。

2020（令和2）年1月31日記